

2022年度 傾向と対策

傾向分析 高校英語までの総合的な基礎知識と実践的な読解力が問われる

1 出題形式は？

A0・公募制推薦入学試験ともに大問3題、解答数20問の構成で、解答は全問マークセンス方式による四者択一となっている。試験時間は、国語または数学と合わせて60分である。

2 出題内容はどうか？

大問Ⅰは日常的な題材を取り上げた長文読解問題で、内容理解問題、語彙の意味を問う問題などが出題された。大問Ⅱは短文の空所補充問題で、基礎的な文法知識が問われた。大問Ⅲも同じく空所補充問題であるが、会話表現や語彙の知識を問うものが中心に出題された。

3 難易度は？

長文内の単語や空所補充問題で問われる表現はいずれも基礎的なレベルのものであり、基礎をかためておく必要がある。

受験対策

1 基本的な語彙・文法事項を確実におさえよう

出題レベルは基礎的であり、難しい単語や表現はほとんど登場していないが、基礎的な知識を確実におさえないと選択肢を1つにしぼれない問題もある。高3までの学習範囲を網羅している単語帳と文法問題集を用いて繰り返し演習を行うことで、基礎をかためよう。また、単語の活用形や文の時制などには特に意識して学習を進めると、空所補充問題に強くなる。

2 制限時間、時間配分に意識を向けて解く練習をしよう

A0・公募制推薦入学試験は2科目選択制で、制限時間は合計で60分であるため、他教科を含めた時間配分を考えることが不可欠になってくる。自分で設定した時間のなかで、いかに正確に解き進められるかがカギとなるため、日頃の演習でも各大問を解答する際には制限時間を設けて、本番さながらに解き進めることを意識しよう。

3 日頃から長文に触れ、読解に慣れよう

A0・公募制推薦入学試験の長文で取り上げられたテーマは、流行しているSNSとボードゲームであり、日常生活に密接した内容であった。長文読解の演習も重要だが、日頃から英字新聞、英語のオンラインニュースを読む習慣をつけると英文に抵抗がなくなり、一般常識の知識も増えるので一石二鳥である。

2022年度 数学 A0・公募制推薦入学試験【全学部共通】

傾向分析 基礎的なレベルの問題であるが、正確かつ迅速な解答力が要求される

1 出題形式は？

全問マークセンス方式の出題である。大問Ⅰ・Ⅱが必答，大問Ⅲ・Ⅳ・Ⅴから2題選択し，合計4題解答することになる。大問Ⅰは小問3問の小問集合，他の大問は1つの分野について各3問の小問が出題されている。試験時間は，国語または英語と合わせて60分である。

2 出題内容はどうか？

出題範囲は数学Ⅰ・Aである。問題番号順に，AO入試は「小問集合（必要十分条件など）」、「2次関数」，「場合の数と確率」，「整数の性質」，「図形の性質」，公募制推薦入試は「小問集合（三角比の相互関係など）」，「数と式」，「場合の数と確率」，「整数の性質」，「図形の性質」から出題された。各年度，大問Ⅰにおいて分野の調整をして，全体として数学Ⅰ・Aの範囲を偏りなく出題しようと工夫されている。

3 難易度は？

基礎的なレベルの問題であり，教科書の節末問題，参考書の例題などの典型的な問題が多い。思考を必要とする小問が1，2問含まれているが，難解な問題ではなく，全問取り組みやすい。ただ，試験時間が他教科と合わせて60分と短いので，見直しなどはできないであろう。正確な即答力が必要とされる。

受験対策

1 基本事項の徹底理解をしよう

全般に取り組みやすい典型的・定型的な問題が多く，平日頃の学習量の差が表れやすい設問である。教科書の節末問題や教科書傍用の問題集などで，基本的公式や基礎知識を習得し，使いこなせるようにしておこう。決して難解な問題集や参考書は必要とせず，基礎～標準レベルの問題を数多く解いておくことが大切である。

2 迅速かつ正確な計算力を身につけよう

全問マークセンス方式で結果のみを求められているため，計算ミスは致命的である。試験時間が短いこともあり，見直しをしている時間的余裕はない。正確かつ迅速な計算力が要求される。平日頃の問題演習を通して，計算を途中でやめたりせず，最後まで計算を行う習慣をつけたい。また，条件を箇条書きにするなど，要領の良い解答方法を修得するように努めよう。

3 苦手分野を作らず，オールラウンドな学習をしよう

全ての問題を通して出題範囲からほぼ全分野出題されている。苦手分野を作らず，どの分野でも十分に対応できる基礎学力をつけておこう。過去問題を通し，演習を積み重ねておくとよい。

傾向分析 限られた時間の中で、いかに正確に解くことができるかがポイントとなる

1 出題形式は？

A0入試・公募制推薦入試とも試験時間は、英語または数学と合わせて60分である。解答形式はともに全問マークセンス方式である。A0入試は論理的文章を題材にした大問Ⅰと言語知識を扱った大問Ⅱの2題構成であり、大問Ⅰが解答数13問、大問Ⅱが解答数4問となっている。一方、公募制推薦入試は論理的文章を題材にした大問1題の出題であり、解答数は17問となっている。

2 出題内容はどうか？

A0入試は、大問Ⅰで漢字の書き取り、言葉の意味を問う問題、接続語や語句の空欄補充問題、波線部分の内容や理由を問う問題、内容合致問題などが、大問Ⅱで四字熟語で用いる漢字を問う問題と慣用句の意味を問う問題が出題されている。一方、公募制推薦入試では、漢字・言葉の意味、対義語といった言語知識を問う出題のあと、接続詞や語句の空欄補充問題、波線部分の内容や理由を問う問題、筆者の考えを問う問題などが出題されている。

3 難易度は？

A0入試・公募制推薦入試とも、漢字の書き取りなどの言語知識を問う問題は、基礎的な内容になっている。読解問題は、高校生にとっては比較的読みやすい文章を題材に、標準的なレベルの問題が出題されている。時間をかけて読み解けば決して難しい問題ではないが、他教科と合わせて60分という限られた時間のなかで、いかに正確に各設問に対応できるかがポイントになる。

受験対策

1 漢字対策を万全にしよう

A0入試・公募制推薦入試とも漢字の出題割合が高く、また標準的な難度の漢字が出題されるため、ここで失点すると合否に大きく響く。読解問題に取り組むなかで知らない言葉や書けない漢字が出てきたら、意味を調べたり書けるように練習したりすることで、漢字の対策を行おう。

2 問題演習で読解力の養成をしよう

読解問題について一問一問丁寧に解説を読むことで、問題の解き方を身につけよう。また、問題演習を通してさまざまな文章に触れることは、各分野への理解を高め、問題文を読み取る基礎力となる。苦手意識を持っているならば、苦手だからこそ内容理解につとめるようにしよう。

3 早めに過去問題に取り組もう

過去問題に取り組むことは、出題の傾向を知るだけでなく、現在の力を知り、今後どのように学習を進めていくかを考える手掛かりになる。できるだけ早い段階で過去問題に取り組み、自分がどんなところで失点しているかを分析してみよう。得意な分野を伸ばすことに加えて、不得意なところを補うことで得点を伸ばしやすくなる。

傾向分析 基礎的な語彙力・文法力、長文の正確な読解力が問われる

1 出題形式は？

大問4題、解答数30問の構成で、全問マークセンス方式で四者択一である。試験時間は60分である。

2 出題内容はどうか？

大問Ⅰの長文読解問題では内容と合致する選択肢を選ぶ問題、空所補充問題などが出題された。大問Ⅱは会話文問題で、文中の空所に入れる適切な語句を選ぶ問題であった。大問Ⅲ、大問Ⅳは空所補充問題で、大問Ⅲでは会話表現、大問Ⅳでは文法の知識が問われた。

3 難易度は？

長文内に登場する単語や空所補充で問われる文法、表現は基礎レベルであり、高3までの学習範囲の基礎をかためておくことが重要である。

受験対策

1 文法・単語の基礎をマスターしよう

問題全体を通して、使用されている単語や表現は基礎レベルのものがほとんどであるため、基本的な事項をおさえた単語帳・文法問題集を1冊ずつ用いて基礎的な知識をしっかりと積み重ねられれば、スムーズに解き進めることができると考えられる。単語を覚える際は反義語・同義語も同時に覚えるようにし、文法を学習する際は語順や単語の活用形まで意識するようにしよう。

2 推測しながら読む習慣を身につけよう

長文中に知らない単語が出てきたり、意味のわからない単語の定義を問われたりしたときは、あきらめずに文全体の流れから意味を想像してみよう。特に会話文問題などでは、前後の文脈によって正答を選択することになるため、推測力が試される。日頃の長文読解演習においても、わからない表現や単語はすぐに辞書を見ず、まずは自力で推測してみることをおすすめする。

3 長文をすばやく、正確に読み進める力をつけよう

長文読解問題では、限られた時間の中で文章全体の内容を正確に把握する力が試される。本番で時間配分を失敗することがないように、日頃の演習時から時間制限を設けて解くことで、自然と読解のスピードも上がってくる。また、内容を問う設問を先読みし、長文内でヒントとなりそうな箇所に傍線を引くなど、印をつけておくと、よりスムーズかつ正確に解答することができるようになる。

傾向分析 基礎～標準レベルの問題に対応できる、十分な学力が求められている

1 出題形式は？

全問マークセンス方式の出題で、試験時間は60分間である。問題数は大問Ⅰ・Ⅱ・Ⅲが必答、大問Ⅳ・Ⅴ・Ⅵから2題選択し、合計5題解答することになる。大問Ⅰは小問3問の小問集合、他の大問は1つの分野について各3問程度の小問がそれぞれ用意されている。

2 出題内容はどうか？

出題範囲は数学Ⅰ・Aである。問題番号順に、「小問集合（三角比など）」、「集合」、「2次関数の最大・最小」、「場合の数」、「 n 進法」、「図形の性質」が出題された。大問Ⅰの小問集合で分野の調整が行われ、満遍なく出題がなされている。

3 難易度は？

基礎～標準レベルの問題が中心であるが、公式を当てはめて解けるような単純な問題ではない。決して高度な知識を必要とする問題ではないが、問題自体がひと工夫されており、しっかりと考えて解くことができる基礎的学力が要求される。

受験対策

1 基礎的な学力と粘り強い思考力をつけていこう

基礎～標準レベルの典型的・定型的な問題が多い。したがって、教科書の節末問題、教科書傍用の問題集で数多くの問題演習を行うとよい。難解な参考書や問題集は必要としない。基礎～標準的な参考書の例題などを粘り強く解き、類題演習を通して基礎的学力と思考力を養成すればよい。また、過去問題を解くことも、難易度や問題の感触をつかむ有効手段である。

2 マークセンス対策をしっかりと行おう

全問マークセンス方式であり、計算ミスや勘違いは致命的である。さらには、決して余裕がある試験時間ではないため、見直す時間は期待できない。正確かつ迅速な計算力が要求される。常日頃の問題演習でも、ここまでできれば大丈夫だと思って計算を途中でやめたりせず、最後まできちんと計算する習慣をつけよう。

3 苦手分野を作らず、数学Ⅰ・A全般への対応力をつけよう

数学Ⅰ・Aの範囲から、ほぼ偏りなくⅠ～Ⅵに出題されている。その6題中5題を解くわけであるから、苦手分野は極力なくすようにしたい。苦手分野については、まず教科書を再読・理解し、教科書の例題、練習、基礎問題集を用いての演習などの順で克服したい。さらには、出題範囲の全般的な学力アップも心掛けたい。

傾向分析 文章内容の理解度がさまざまな角度から試されるオーソドックスな出題である

1 出題形式は？

試験時間は60分、解答形式はすべてマークセンス方式である。出題構成は、論理的文章を題材にした大問2題である。解答数はそれぞれ16問ずつ、合計32問となっている。

2 出題内容はどうか？

大問Ⅰ・大問Ⅱとも、出題形式はほぼ同様である。問1で漢字問題、問2で言葉の意味を問う問題、問3で空欄補充問題などの主に語彙力を問う問題が出題されている。問4以下では、文章理解、すなわち読解力を問う問題が出題され、例えば、本文をもとに筆者の主張を理解する問題、論理の構成や前後の文脈をもとに空欄に入る文を選択する問題などが含まれている。

3 難易度は？

大問Ⅰ・大問Ⅱとも、オーソドックスな出題内容で、難易度は標準レベルである。ただし、ある程度この問題形式に慣れていないと、60分という制限時間で正確に回答するのは難しいと思われる。また取り上げられているトピックになじみがなければ、さらに時間の余裕が少なくなる。

受験対策

1 過去問題をもとに出題傾向をとらえよう

文章内容は異なるが、ほぼ同じ形式の大問が出題されるのが一般入試の特徴である。この点から、過去問題に早めに取り組み、どのような形式で問題が出されるのかを把握し、解答方法の傾向をつかむことが大切だ。例えば接続語が苦手なら、問題演習を行うときに接続語の問題に留意するなど、自分の弱みを補うように学習を進めてほしい。

2 新しい知識に積極的に触れよう

デジタル化やコミュニケーションの問題など、現代社会に生きる私たちにとって重要な内容を扱った文章が出題されている。日頃から新聞やニュースからさまざまな知識に触れることができるよう、視野を広げて興味関心のアンテナを張り巡らせよう。社会で生じている問題について自分の考えをまとめることによって、問題を理解して論理的に考える力をつけることが大切だ。

3 傾向が似ている問題集で多くの論説文・評論文を読んでおこう

市販の問題集でよいので、論説文・評論文を中心に、一日一題でも問題演習を行うことが有効だ。国語力を一朝一夕に向上させる方法はない。問題の解き方を身につけるとともに、論説文や評論文で取り扱われている分野への理解を深めれば、語彙力や読解力は必ず自然に身につけてくる。普段の取り組みが合格への道である。

傾向分析 図や問題文を読ませて解かせる問題が多く正確な知識や問題文を理解する力が必要とされる

1 出題形式は？

大問数4題，小問数30問弱からなるマークセンス方式の試験である。大問Ⅰ・Ⅱは1つの問題になっているがⅢ・ⅣはAとBに分かれており，どの問題も文章を読みながら答えていく形式である。試験時間は60分である。

2 出題内容はどうか？

生物基礎と生物（生命現象と物質，生殖と発生，生物の環境応答）からの出題である。顕微鏡の使い方，細胞・細胞とエネルギー，呼吸とATP，光合成と光合成速度，血液の役割，免疫，細胞膜の作りと浸透圧，生殖細胞の分裂，セントラルドグマ，DNAとバイオテクノロジーに関する問題が出題されており，幅広い知識が要求される。

3 難易度は？

実験問題を含めて教科書の内容が中心となっていて，基礎的な知識と実験方法の正確な読み取り方が身につけていなければ解ける問題である。呼吸やDNA，免疫などは細かい内容も出題されている。関係のある細胞がどのようなはたらきをするのか，正確に理解しよう。

受験対策

1 実験の目的と結果を正しく理解できるようにしよう

実験・考察の問題は標準的で毎年出題されている。そのため実験問題の問題演習に慣れておくことは必須といえる。実験問題ではその実験の目的を理解し，得られた結果のうち，どの結果からどのようなことが言えるのか，正しく把握できるようにしよう。

2 同じような用語の使い方の違いをきちんと理解しよう

用語の暗記が重要なことは言うまでもないが，ただの丸暗記になってしまいがちである。そのため，暗記にあたっては各語を単体で覚えるのではなく，類似・関連する用語どうしをグループ化し，用語どうしの使い分けなどに注目しながら覚えていくようにしよう。

3 問題文の内容をきちんと把握しながら読む癖をつけよう

大問Ⅰの問3や大問Ⅲの問4のような問題では，問題文の下線部の内容をきちんととらえないと間違いを選ぶことにつながる。日頃から気をつけて問題文を読む習慣を身につけよう。